

こころ

夏目漱石



新潮文庫

こゝろ

夏目漱石著



新潮社版

315

こゝろ



定價 110 圓

新潮文庫

昭和二十七年二月二十九日 發行
昭和四十一年七月二十五日 四十二刷

著者 夏目漱石

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐藤 亮一

發行所 株式會社 新潮社
東京都新宿區矢來町七一

電話東京二六〇局一一二(大代)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・塚田印刷株式會社 製本・憲專堂製本所

© Printed in Japan

目次

上 先生と私……………七

中 兩親と私……………六二

下 先生と遺書……………一三四

註……………二五八

解説 本多顯彰

新潮文庫

こゝろ

夏目漱石著



新潮社版

315

目次

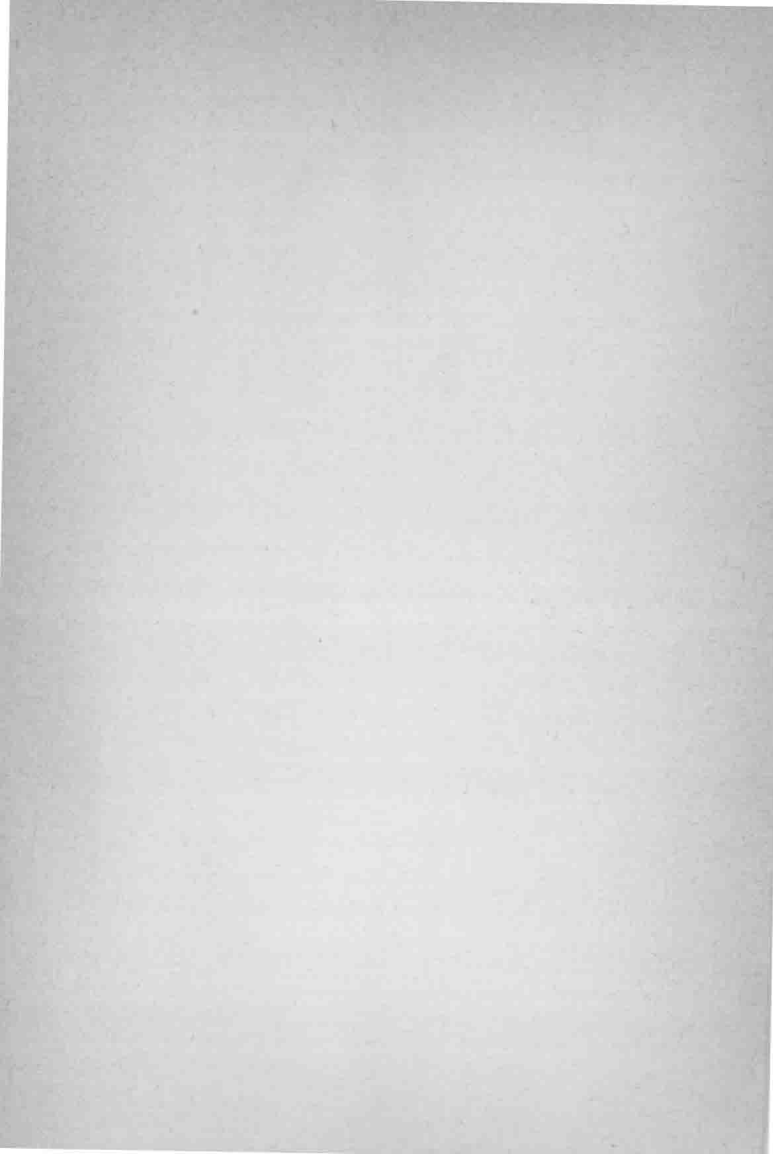
上 先生と私……………七

中 兩親と私……………六二

下 先生と遺書……………一三四

註……………二五八

解説 本多顯彰



こ

ゝ

ろ

上 先生と私

一

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所々しい頭文字杯はとても使ふ氣にならない。

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からは是非来いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二三日を費やした。所が私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に國元から歸れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと斷つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから國元にゐる親達に勧まない結婚を強ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の當人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに當然歸るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしやうと相談をした。私には何うして可いかならなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より歸るべき筈であつた。それで

彼はとう／＼歸る事になつた。折角來た私は一人取り殘された。

學校の授業が始まるにはまだ大分日數があるので、鎌倉に居つても可し、歸つても可いといふ境遇にゐた私は、當分元の宿に留まる覺悟をした。友達に中國のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、學校が學校なのと年が年なので、生活の程度は私とさう變りもしなかつた。従つて一人坊つちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒も有たなかつたのである。

宿は鎌倉でも邊鄙な方角にあつた。玉突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い喉を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十錢は取られた。けれども個人の別荘は其所此所にいくつでも建てられてゐた。それに海へは極近いので海水浴を遣るには至極便利な地位を占めてゐた。

私は毎日海へ這入りに出掛けた。古い燵ふり返つた藁蓆の間を通り抜けて磯へ下りると、此邊にこれ程の都會人種が住んでゐるかと思ふ程、避暑に來た男や女で砂の上が動いてゐた。ある時は海の中が錢湯の様に黒い頭でごちや／＼してゐる事もあつた。其中に知つた人を一人も有たない私も、斯ういふ賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寐そべつて見たり、膝頭を波に打たして其所いらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は實に先生を此雑沓の間に見付出したのである。其時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不圖した機會から其一軒の方に行き慣れてゐた。長谷邊に大きな別荘を構へてゐる人と違つて、各自に専有の着換場を拵えてゐない此所いらの避暑客には、是非其斯うした共同着換所といった風なものが必要なのであつた。彼等は此所で茶を飲み、此所で休息する外に、此所で海水着を洗濯

させたり、此所で鹹^{しほ}はゆい身體^{からだ}を清めたり、此所へ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ這入る度に其茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしてゐた。

二

私^{わたくし}が其掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いで是从^{より}海へ入らうとする所であつた。私は其時反對に濡れた身體を風に吹かして水から上つて來た。二人の間には目を遮^{さか}ざる幾多の黒い頭が動いてゐた。特別の事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた。それ程濱邊が混雜し、それ程私の頭が放漫であつたにも拘はらず、私がすぐ先生を見付出したのは、先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。

其西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着てゐた彼は、それを床^{しやうど}几の上にすぼりと放り出した儘、腕組をして海の方を向いて立つてゐた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。私は其二目前に由井が濱迄行つて、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、其すぐ傍^{わき}がホテルの裏口になつてゐたので、私の凝^{もつ}としてゐる間に、大分多くの男が鹽を浴びに出て來たが、いづれも胴と腕と股は出してゐなかつた。女は殊更肉を隠し勝であつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を被^か間に浮かしてゐた。さういふ有様を目撃した許^{ばかり}の私の眼には、猿股一つで濟まし

て皆みなの前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧りみて、其所にこゝんでゐる日本人に、一言二言何か云つた。其日本人は砂の上に落ちた手拭を拾ひ上げてゐる所であつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。其人が即ち先生であつた。

私は單に好奇心の爲に、竝んで濱邊を下りて行く二人の後姿を見守つてゐた。すると彼等は眞直に波の中に足を踏み込んだ。さうして遠淺の磯近くにわい／＼騒いでゐる多人數の間を通り抜けて、比較的廣々した所へ來ると、二人とも泳ぎ出した。彼等の頭が小さく見える迄沖の方へ向いて行つた。夫から引き返して又一直線に濱邊迄戻つて來た。掛茶屋へ歸ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身體を拭いて着物を着て、さつさと何處へか行つて仕舞つた。

彼等の出て行つた後、私は矢張元の床几に腰を卸して烟草たばこを吹かしてゐた。其時私はぽかんとしながら先生の事を考へた。どうも何處かで見た事のある顔の様に思はれてならなかつた。然し何うしても何時何處で會つた人か想ひ出せずに仕舞つた。

其時の私は屈託がないといふより寧ろ無聊ぶれうに苦しんでゐた。それで翌日あくる日も亦先生に會つた時刻を見計らつて、わざ／＼掛茶屋迄出かけて見た。すると西洋人は來ないで先生一人麥藁帽を被つて遣つて來た。先生は眼鏡をとつて臺の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すた／＼濱を下りて行つた。先生が昨日の様に願がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けたくなつた。私は浅い水を頭の上迄跳かして相當の深さの所迄來て、其所から先生を目標めきしに拔手を切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ

歸り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかつた。私が陸^{きよ}へ上つて零の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入違^{いれちがひ}に外へ出て行つた。

三

私は次の日も同じ時刻に濱へ行つて先生の顔を見た。其次の日にも亦同じ事を繰り返した。けれども物を云ひ掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかつた。其上先生の態度は寧ろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として來て、また超然と歸つて行つた。周圍がいくら賑やかでも、それには殆んど注意を拂ふ様子が見えなかつた。最初一所に來た西洋人は其後丸で姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或時先生が例の通りさつさと海から上つて來て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着やうとすると、何うした譯か、其浴衣に砂が一杯着いてゐた。先生はそれを落すために、後向になつて、浴衣を二三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵兒帶を締めてから、眼鏡の失くなつたのに氣が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて、それを私の手から受取つた。

次の日私は先生の後について海へ飛び込んだ。さうして先生と一所の方角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返つて私に話し掛けた。廣い蒼い海の表面に浮いてゐるものは、其近所に私等二人より外になかつた。さうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照

らしてゐた。私は自由と歡喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生は又ばかりと手足の運動を已めて仰向になつた儘浪の上に寐た。私も其眞似をした。青空の色がぎら／＼と眼を射るやうに痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな聲を出した。

しばらくして海の中で起き上がる様に姿勢を改めた先生は、「もう歸りませんか」と云つて私を促がした。比較的強い體質を有つた私は、もつと海の中で遊んでゐたかつた。然し先生から誘はれた時、私はすぐ「えゝ歸りませう」と快よく答へた。さうして二人で又元の路を濱邊へ引き返した。

私は是から先生と懇意になつた。然し先生が何處にゐるかは未だ知らなかつた。

夫から中二日置いて丁度三日目の午後だつたと思ふ。先生と掛茶屋で出會つた時、先生は突然私に向つて、「君はまだ大分長く此所に居る積ですか」と聞いた。考のない私は斯ういふ問に答へる丈の用意を頭の中に蓄えてゐなかつた。それで「何うだか分りません」と答へた。然しにやや笑つてゐる先生の顔を見た時、私は急に極りが惡くなつた。「先生は？」と聞き返さずにはゐられなかつた。是が私の口を出た先生といふ言葉の始りである。

私は其晩先生の宿を尋ねた。宿と云つても普通の旅館と違つて、廣い寺の境内にある別荘のやうな建物であつた。其所に住んでゐる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生々々と呼び掛けるので、先生は苦笑ひをした。私はそれが年長者に對する私の口癖だと云つて辯解した。私は此間の西洋人の事を聞いて見た。先生は彼の風變りの所や、もう鎌倉にゐない事や、色々の話をした末、日本人にさへあまり交際を有たないのに、さういふ外國人と近付になつたのは不思議だ

と云つたりした。私は最後に先生に向つて、何處かで先生を見たやうに思ふけれども、何うしても思ひ出せないと云つた。若い私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを有つてゐはしまいかと疑つた。さうして腹の中で先生の返事を豫期してかゝつた。所が先生はしばらく沈吟したあとで、「何うも君の顔には見覺がありませんね。人違ひやないですか」と云つたので私は變に一種の失望を感じた。

四

私は月の末に東京へ歸つた。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、「是から折々御宅へ伺つても宜い（よ）さんすか」と聞いた。先生は單簡にたゞ「ええ入らつしやい」と云つた丈であつた。其時分の私は先生と餘程懇意になつた積でゐたので、先生からもう少し濃かな言葉（こまげ）を豫期して掛つたのである。それで此物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私は斯ういふ事でよく先生から失望させられた。先生はそれに氣が付いてゐる様でもあり、又全く氣が付かない様でもあつた。私は又輕微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く氣にはなれなかつた。寧ろそれとは反對で、不安に搖かされる度に、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の豫期するあるものが、何時か眼の前に満足に現はれて来るだらうと思つた。私は若かつた。けれども凡ての人間に對して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に對して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くな